

「文字を書く」ことから出発する言語能力の育成に関する実践的研究

佐々木 雅哉(札幌市立山の手小学校 主任教諭)

◆研究計画立案の背景、出発点

明治の初めに「習字」として独立した教科は、その後「書き方」として国語科の指導領域として位置付いた。国語科の中に位置付きながらも「言語能力の育成」という側面からは無縁の領域であった。「手本そっくりを書く」ことが絶対的な目標であり、技能以外には目標とするものがないまま現在に至っている。

学習指導要領では、「生きる力」の理念が継承され、その力の糧となる「思考・判断・表現力」のさらなる育成を図ることが謳われている。「自ら考え、自ら学ぶ」学習から「書写」が取り残され、本来書写が果たすべき役割から、さらに遠ざかっていく現状に危機感を持ったことが、この研究の出発点である。

◆研究の仮説

1. これまでの学習展開を、「改善のポイント」を定めて見直し、新たな視点で学習を進めることにより、書写学習の中で言語能力を高めていくことができるであろう。
2. 「文字を書くことが楽しい」と感じる時間を、児童に提供することで、書写力を高めたり、生活に生かしていく態度を育んだりすることができるであろう。
3. 実践者にとって障壁になっていた、「書写学習用教材・教具が簡便、効率よく入手し活用できる環境」を整えることで、書写研究・書写学習の裾野が広がり、書写に対する実践者や社会の意識を変えていくことができるだろう。

◆研究の方法

【研究Ⅰ-①】

これまでの学習展開を見直し、改善のポイントとして、

- ① 課題をみんなでとらえて共通のものとする「手立て」を考えること
- ② 課題解決のために、文字の原理や原則を「言葉で」やりとりすること
- ③ 基準とする文字から他の文字へ、発展させていく工夫をすること

を掲げ、授業案を検討し、実践して効果を測定した。

【研究Ⅰ-②】

学校生活1日丸ごとを「文字を見つめる日」と設定し、全校で文字を意識した学習に取り組んだ。このイベント(文字フェスティバル)の開催前後において、文字を書くことへの自信や動機の変容について、専門家の意見を聞き、2校において実験、検証した。

【研究-Ⅱ】

教科書だけでは体感が難しい毛筆特有の性質について、動画を使用した教材を制作した。試作のたびにモニターをしてもらい、改良を重ねた。完成品を広く頒布すべくHPに掲載し、誰でもダウンロードしてすぐ使えるよう環境を整えた。

www.sapporo-syosya.info

◆結果 ○成果●課題

本研究により、提案した「書写学習のこれからの指導展開」は、言語能力の育成に有効であることが明らかになった。

- 【研究Ⅰ-①】では、改善のポイントを明確にして学習全体をデザインしていくことにより、言語能力を高めることができた。また同時に、書写の目標である「書写力」の向上も見られた。
- 【研究Ⅰ-②】では、文字を見つめること、文字を書く楽しさを味わわせることが、文字を大切に、将来「手で文字を書く」ことを愛する態度につながる事が明らかになった。
- 【研究Ⅱ】では、児童が映像により得る情報の大きさを実感した。これまで指導が難しく敬遠してきた「筆圧」や「生活に生かす」単元・分野に大きく切り込んでいくことができた。
- 今後の課題として、【研究Ⅰ】で独自に設定した評価の基準をさらに精査して、それが本当に「将来にわたって活用していける書写力の基準なのか」を、文字イベントの開催時期、規模を含めて吟味していきたい。入学時から卒業まで、さらには小学校、中学校が連携した追跡調査も視野に入れたい。
- 教材・教具の使い方によっては、これまでと大差ない効果に止まってしまうおそれもあるため、実践事例をさらに多くまとめて、実践発表会などで開陳していくことが重要と考える。